

巻頭言

コロナ禍に見る新たな表現

神本 忠光(教授/応用言語学・英語教育学)

"Tap here!" ウェイターにそう言われて、一瞬困惑した。昨夏3年ぶりの渡英初日、レストランでの支払い時のことである。Visa カードを手に暗証番号(PIN)を心裏で確認していると、ウェイターが決済用端末機をテーブルに持参し差し出す。カードの差込み口はどこかと捜していると、"Tap here!" と言う。

端末機上部をカードで軽く触れば、瞬時にして支払い完了。暗証番号など不要だった。コロナ禍を機に非接触 IC 決済が、セルフレジと共に驚くほど浸透したようだ。次の日から、キオスクで新聞買って tap、スーパーで食料品を買って tap。なんでも tap、tap、tap。2カ月間の滞在中に現金を使ったのはわずか1回のみ。日本では「タップ決済」と呼ぶらしいが、同じコロナ禍でも普及率が異なるのは摩訶不思議である。

研究紹介

研究と教育のあいだ

赤井 恵子(教授/日本近代文学)

夏目漱石は講演「私の個人主義」の中で、英国留学時に「自己本位」という生き方を自分の手に握ってから、自分は強くなった、と述べています。その根本的契機は、専攻している英文学の作品を読んでゆく際の、構えをつくることにありました。本場英国の批評家の意見と自分のそれとが矛盾することはあり得る。しかし多くの日本人は自らが納得したわけではない本場の批評を「鵜呑み」にし、それを「触れ散らか」していた、と漱石は自省も込めて述べます。しかし「私にそう思えなければ、到底受売をすべきはずのものではな」く、本場の批評と自己の意見との矛盾が何に由来するかを考えなければならなくなる、と。

「風俗、人情、習慣、溯っては国民の性格皆この矛盾の原因になっているに相違ない」—(略)—「たといこの矛盾を融和する事が不可能にしても、それ

を説明する事は出来るはずだ」——このくだりに私は外国語学部での学びに深く通じるものを感じます。漱石研究者である私が、この講演を毎年授業でとりあげる理由はそこにあります。

そういえば、私が大学院生だった頃、こんなことがありました。カナダからの留学生が井伏鱒二「鯉」について研究発表したときのこと。やがて天逝してしまう無二の親友から「私」に贈られた一匹の白い鯉をめぐる物語です。その鯉のすみかを変えてやる必要ができ、「私」は鯉を池から釣り上げ洗面器に入れ、器の上をいちじくの葉で覆います。件の留学生はその場面を、『旧約聖書』にあるアダムとイブが自らの腰を覆ったいちじくの葉と関連付けて解釈し、そこに性的なニュアンスを読み取ったのです。指導教官や日本人院生は大層驚き、侃々諤々の議論になりました。

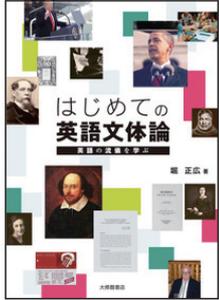
文化の異なる読み手の解釈が演習の討論をあんなにも活性化させたことは、いまだに忘れられません。この作品「鯉」も、今の私の教材の一つです。

書籍紹介

堀 正広著

『はじめての英語文体論 英語の流儀を学ぶ』
大修館書店、2019年、2,200円+税

堀 正広（教授／英語学・文体論・コーパス言語学）



本書は、英語学習において、文体への意識は必要不可欠なものであるという視点に立ち、具体的な例を通して文体を意識することの重要性を説いています。様々なジャンルの文体を分析し、言葉の奥深さに触れつつ英語力の向上を図り、英語学について

の基本的な知識を習得していきます。最終的には、小論文や卒業論文、さらには修士論文作成が出来るように配慮しました。

目次は次の通りです。第1章「文体・スタイルとは何か：語にも音にもスタイルはある」、第2章「話し言葉と書き言葉：レジスターとは」、第3章「言

葉のやりとり：会話のスタイル」、第4章「スピーチのスタイル：レトリックの宝庫」、第5章「新聞・メディアの文体：情報の伝え方」、第6章「研究論文の文体：アカデミック・ライティングとは」、第7章「文学作品のスタイル：文学に共通した言語特徴」、第8章「詩のスタイル：言語学的アプローチ」、第9章「小説のスタイル：言語学的アプローチ」、第10章「文体は時代と共に変わる：歴史文体論と表現史」、第11章「英訳するということ：翻訳と文体」、第12章「これからの文体論：新しい研究の可能性」、第13章「文体研究をはじめのあなたへ：スタイル研究のスタート」。

本書は、有り難いことに、『英語教育 10月増刊号』『英語学／言語学』分野の2019年度のベスト3の一冊に選ばれました。今年4月に出版予定の『仲良し単語を知って英語を使いこなそう：コロケーション学習のすすめ』も含めて、もうしばらく英語教育関係の本を執筆していく予定です。

学科最新news

Ostman, David(准教授／英語教育・異文化理解力・異文化コミュニケーション論)

令和4年12月14日（水）英米学科の第20回のスピーチ大会が開催されました。2年間のオンライン開催を経て、今年、KGUスピーチコンテストは対面式に戻りました。緊張しながら人前に立ち、明るく自信をもってスピーチを行うことは決して簡単なことではありません。英語の授業ではプレゼンを行う機会がありますが、スピーチ大会は一味違います。通常のクラスではプレゼンの評価は内容中心ですが、スピーチ大会の場合は英語の発音やイントネーションやジェスチャーを巧妙に駆使して聴衆と審査員を感動させなければ、勝ち目はないのです。この感動させる力は人を説得する能力と自分をアピールする才能につながり、就職活動の成功や社会生活における健全な人間関係を築くことにとっても役に立ちます。自分の伝えたい「内容」がどんなに素晴らしいものだとしても、それをうまく人に伝えなければ、望んでいる結果には至りません。スピーチ大会を積極的に準備し、行うことで、この感

動させる力が身に付きます。時代は変わりつつありますが、スピーチ大会の意義と大切さは今も変わりません。

今回のスピーチ大会の参加者は13名でした。英米学科4年生の小田祥潤さんが司会者を務め、審査員として佐藤勇治教授とトウメイ・ジョセフ教授に務めていただき、審査業務に加え全参加者に励ましの言葉と細かいアドバイスを提供されていました。ベスト・スピーチ賞は村松来希さんが受賞し、審査員特別賞の受賞者は森川紫苑さんと宮前夏海さんでした。今回のスピーチ大会に参加できなかった学生は是非、来年に！



編集人 坂田 直樹

〒862-8680 熊本市中央区大江2-5-1

TEL: 096-364-5161(代表) Mail: na-sakata@kumagaku.ac.jp